

思い出のムカデたち

小嶋祥三

チョウについて書いたので、ついでもないが、大変に悩まされたムカデについて一筆。東京渋谷区の住宅街で大型のムカデ（トビズムカデ）を見かけることはほとんどなかったし、まして家の中をウロウロされることはなかった。ところが、自然が残っている犬山の林の中の集合住宅（鉄筋コンクリートの5階建ての宿舎だった）ではしばしばムカデに悩まされた。正しく「条件反射」で、黒っぽく細長いものが眼の端に入ると、サッと緊張が走り身を引いた。それは東京に戻ってからもしばらく続き、「消去」には時間がかかった。とにかく、咬まれるとひどく痛いのだ。そんなムカデとの出会いを書いてみる。



ネットにあったトビズムカデの写真を上に載せておく。10-15 cm ほどのピカピカと黒光りする胴体に赤い頭部、胴には 21/23 対の足があるそうだ（数えたことはない。百足と書くがそれほど多くはない）。頭部には1対の長い触角と短い牙のような顎肢があり、それで咬むと毒がでる。仔細に眺めるとプレデターのような戦闘的な面構えである。ムカデは4月の末頃から姿を見せた。特に雨が降る夜は警戒した（ムカデは夜行性である）。警戒していると本当に出てきたりして、忌々しかった。したがって、梅雨の頃にムカデと遭遇する機会が最も多かった。夏の暑い盛りには出現頻度が減ったが、秋になるとまた増えた。慣れない頃は箸で掴もうとしたが、テキも多くの足で畳を掴み、簡単に引きはがすことはできなかった。最終的には箸で頭部を押さえ、ラジオペンチで胴の中央部を掴むことにした。掴んでも手元に向かって身体を伸ばしてくるので、中央でないと咬まれてしまう。ペンチに咬みつくと振動がコツンコツンと手に伝わってきた。殺虫剤では簡単に死なないので、熱湯をかけて殺処分にした。熱湯で身体はやや縮み丸みを帯び、見ることもない腹側は意外と肉感的？だったが、それを庭にポーンと放り投げて一件落着となった（合掌）。以下に印象に残ったムカデたちについて書いてみる。

ムカデに初めて出会ったと思われるのは犬山に赴任して半年ほどたった5、6月のジメジ

メした夜だった。思われる、と書いたのは姿を見ていないからである。まだ独身で、学生気分が抜けていない頃だったと思う。明かりをつけたまま布団でうたた寝をしていたが、腕に強い痛みを感じて目が覚めた。何が起こったのか分らなかった。ヒリヒリと痛みが続いたが、経験がないので虫に咬まれたとは思わなかった。腕の方に注意が向き、布団の周りを探すことはしなかった。この日はこれで終わった。その後、ムカデに咬まれた時に同じ痛みを経験したので、あの時咬んだのはムカデだったのかと分った次第である。

さて、ムカデに咬まれたらアンモニアを塗るのが有効だったと記憶しているが、そういった処置をしないと、赤くはれ熱を持った。何日かではれはひいたが、今度は痒くなった。咬まれても病院に行ったことはない。ネットに手を咬まれた人が写真をアップしていたので拝借する。これらの人は左手を咬まれたようだが、右手と比較して、赤くはれているのが分る。



別のムカデの話である。ある夜のこと、私は耳元のボン！という音で目が覚めた。薄暗がりの中で白いシーツの上に細長い黒いものがみえた。ムカデかと明かりをつけるとテキは逃走を始めた。天井を這っていたムカデが枕元に墜落したのだった。かれらはあの足で重力に逆らい、壁や天井を自由に移動できるのだ（ステンレスの流しは這い上がれなかった）。床を這うだけではない。落ちたのが顔の上でなくて幸いだった。夏は蚊帳を吊ったので一安心だった（蚊もすごかった。蚊帳にはムカデよけという別の機能があるのだ）。かれらは身を隠すとじっとしている傾向があった。この時は敷布団の下に潜り込んでいたのを捕まえ、あの世に行ってもらった。

ある朝のこと、私は出勤するのでズボンをはいた。しかし、ふくらはぎに何か触れたような気がした。まさか！と思いつつそっとズボンを脱ぎ、中をのぞくとやはりムカデがしがみついていた。ゴム長靴を履いた時にも同じ経験をした。やはり、ふくらはぎに違和感があった。このようなことが繰り返されると、ズボンや長靴をはく前に中をチェックす

るようになった。

あまり楽しい話ではないので、これで最後にする。ある夜のこと、私は左の腕がチクチクするような、何かしがみついているような感じがして半分目覚めた。眠い中で腕を振ってみても腕の奇妙な感覚は無くならなかった。そのようなことをしているうちに意識がはっきりしてきた。これはムカデではないかと思い、パジャマの袖先を持ち上げてみた。すると腕の奇妙な感覚から開放された感じになると同時に、畳の上をショリショリとムカデが移動する音が聞こえてきた。あわてて明かりをつけて捕まえた。腕にはしがみつかれていた時の感覚が残っていて不快だった。その感覚は今も腕に再現できる。幸いにもムカデは頭を掌の方に向けてしがみついていたのだろう。感覚を消すかのように腕をさすりながら、よく咬まれなかったなと安堵した。

ムカデは平たい身体で、ガラス戸のレールや上部の隙間から家の中に入ってこられるので侵入を防ぐことは難しかった。結局 4, 5 回咬まれたと思う。まだ茶色い小さなムカデに咬まれてもそれなりに痛かった。妻は一晩に 2 回咬まれた記録を持っている。こんな生活を 30 年以上したのだった。